表紙写真　昆布番屋が立ち並ぶ羅臼町の海岸沿いに電気柵を設置する職員

知床財団
SHIRETOKO NATURE FOUNDATION

Annual Report 2014　2015年9月30日発行

〒099-4356 北海道斜里郡斜里町字岩宇別531番地　公益財団法人 知床財団
Tel 0152-24-2114 Fax 0152-24-2115　E-mail info@shiretoko.or.jp　HP http://www.shiretoko.or.jp

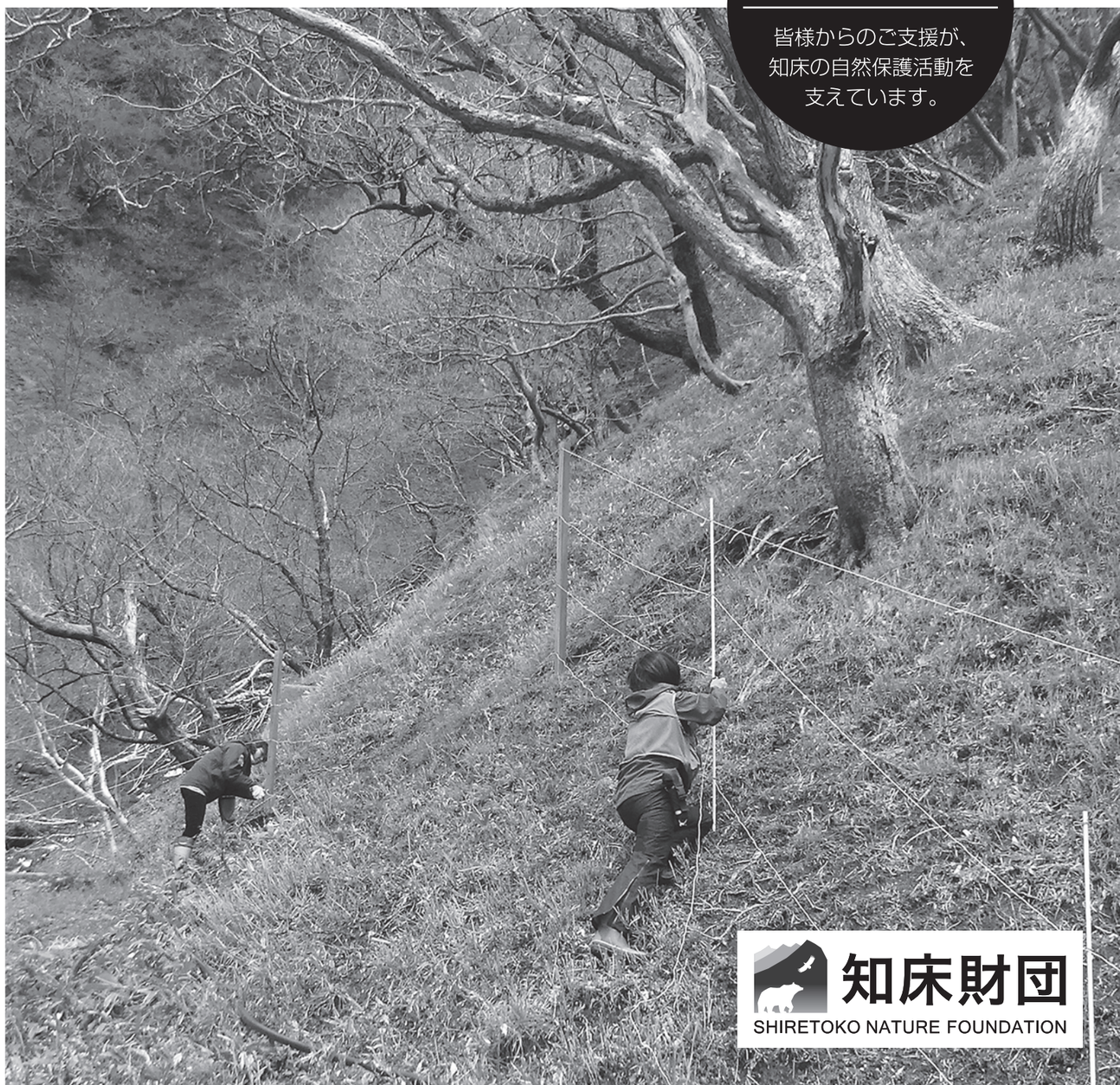
発行　公益財団法人　知床財団　　発行日　2015年9月30日

REPORT 2014

2014年度活動報告書

世界自然遺産
知床を未来へ

皆様からのご支援が、
知床の自然保護活動を
支えています。



知床財団
SHIRETOKO NATURE FOUNDATION

Contents

2014年度の年次報告書に寄せて
2014年度の決算概要
2014年度の賛助会の状況
2014年度の寄附状況

【公益事業】普及啓発事業
- 地域向け環境教育
- 地域向け講座・イベント
- 学習教材開発・運用
- 職員研修
- ボランティア活動の推進
- 人材育成・就業体験の受け入れ
- 情報発信・サポーター拡大
  - JBN
  - 講座・イベントの運営
- ビジター向けインフォメーション・環境教育
- 知床自然センター内外刷新

【公益事業】施設管理事業
- 知床自然センター
- 知床自然教育研修所
- 知床五湖園地
- 羅臼ビジターセンター管理運営業務
- ルサフィールドハウス管理運営業務

【公益事業】調査研究・野生動物対策事業
- エゾシカ個体群の動態に関する調査
- 幌別ー岩尾別地区におけるヒグマの生態等に関する調査
- ルシャ地区におけるヒグマの生態等に関する調査
- 知床岬の漁業者の暮らしを守る電気柵導入実験
- 希少鳥類などの長期モニタリング
- 海生哺乳類のモニタリング
- 水域における生物群集のモニタリング
- 学術的な交流と成果公表
- シホテ・アリンとの世界遺産交流
- 知床GISデータベースの作成
- 知床GISデータベースの作成
- 羅臼町におけるオオセグロカモメ生態調査
- ヒグマ対策手法の開発
  - ヒグマの管理対策
  - 自然環境の管理対策
  - エゾシカ関連業務
  - 外来生物の調査・対策
  - 地域住民とヒグマの安全安心共存プロジェクト
  - 世界自然遺産地域とその周辺における調査業務
  - 科学委員会等運営業務

【公益事業】公園利用管理事業
- 適正利用・エコツーリズム検討業務
- 知床五湖利用適正化業務
- カムイワッカ地区利用適正化業務
- 幌別地区活用検討業務
- ルサ地区活用検討業務

【公益事業】森林再生事業
- しれとこ100平方メートル運動森林再生業務
- しれとこ100平方メートル運動普及推進業務

【収益事業】
- 販売・有償貸出し業務
- 羅臼研究支援センター維持管理業務
- 研修・講演・視察対応業務

【法人会計】
- 財団法人管理運営事業

【組織概要】

目次、本文中にあるマークは、寄附金・賛助会費によって実施している事業であることを示しています。

■知床財団の使命

私たち知床財団は知床半島をホームグラウンドとし、
世界遺産知床の自然を守り、より良い形で次世代に引き継いでいきます。
野生動物やその他の自然環境の保全・管理に携わる組織として常に先駆者であり続け、人間が自然と親しみ調和していける社会の発展に寄与します。

2014年度年次報告に寄せて

公益財団法人　知床財団　理事長　関根郁雄

2014年度の知床は5月の連休中に斜里町と羅臼町を結ぶ横断道路が開通し、その後比較的天候に恵まれたこともあり、穏やかな滑り出しとなりました。一方で、冬期には波状的な低気圧の襲来による暴風雪に何度も見舞われ、特に羅臼町は過去にない厳しい冬を経験しました。このため知床財団が運営管理する各施設においても、臨時閉館等の対応に追われました。

ヒグマの動向に関しては、2013年度と同様に比較的平穏な状況で推移しました。2012年、マスの遡上時期に頻繁に出没した若いヒグマと、それを撮影しようと集まったカメラマンで混乱した斜里町の岩尾別川沿いでは、関係機関と事前調整の上、監視員配置等の対策を準備していましたが、結果的にはサケマスの遡上量が極めて少なかったこともあり、大きな混乱は生じませんでした。

利用調整地区制度導入から4年目となった知床五湖園地は、駐車場の拡張工事のため、例年より短い開園期間となりましたが、ヒグマの出没も少なく、また、制度の認知が進んだこともあり、開園中は安定した運用を行うことができました。

知床五湖園地において一定の方向性が確立された一方で、冬期利用や先端部地区の利用、野生動物観察を目的としたツアーなど、他の地域での利用のあり方については、引き続き議論の途上にあります。知床財団としても適正利用・エコツーリズム検討会議等で積極的に発言、関与しました。また、斜里側では、今年度の新たな取組みとして知床自然センター周辺の幌別地区の活性化と、しれとこ100平方メートル運動地のトラスト資産の公開を主目的に、新たなトレイル運用を軸とした社会実験を実施しました。羅臼側では、ルサフィールドハウス周辺の活用をテーマにした、知床財団独自の「ルサ地区活性化構想」の取りまとめを行いました。

国からの受託事業として知床財団の業務に大きなウェイトを占めつつあるエゾシカ対策事業では、世界自然遺産地域内での環境省事業に加え、遺産地域に隣接するエリアでの林野庁の囲いワナによる捕獲業務を受託しました。これらシカ対策受託事業の増大により、今年度は知床財団としては過去最高の事業収益となりました。そして、2007年度からエゾシカの個体数調整が継続されている知床岬地区では、徐々に植生の回復が進んでいます。今後はいかにこの状態を持続させるかが、課題となっています。

その他、9月にはかねてより交流を進めているロシアのシホテ・アリン自然保護区を職員2名が訪問し、調査や現地職員の方々との交流を行うとともに、学術協力のための協定書を取り交わしました。海外にも視野を広げ、参考となるものは吸収しつつ、地域への情報発信はもとより知床から国内外への情報発信にも力を入れていきたいと思います。今後とも、ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

関根　郁雄　Ikuo Sekine

北海道斜里郡小清水町出身。斜里町政に長く関わり、日本のナショナル・トラスト運動の草分けとなった『しれとこ100平方メートル運動』スタート後の昭和54年度からは、企画振興課長として、この運動を精力的に推進した。その後も斜里町助役、副町長を歴任。平成5年には知床の世界遺産登録を提案、当時の午来町長とともに登録に向けた取組みに邁進し、知床の自然保護活動の歴史に新たな１ページを刻んだ。

［歴代理事長及び任期］
藤重千秋　（1988年9月23日～1997年9月23日）
法量　武　（1997年9月24日～2003年3月31日）
森　信也　（2003年4月1日～2009年3月31日）
関根郁雄　（2009年4月1日～）

2014年度の決算概要

2014年度の総事業費は3億2千9万円

知床財団の事業費は「独自事業」、「斜里町・羅臼町委託事業」、「その他委託/請負事業」の大きく3つに分類されます。中でも、独自事業は賛助会費や寄附金が重要な財源となっています。賛助会員をはじめとする多くの方々の継続的なご支援により、2014年度は全69事業を行いました。

1. 独自事業

（事業数29 事業費4千504万円）

賛助会費や寄附金の他、知床自然センター及び羅臼ビジターセンターでの販売物収入が主な財源となっています。

2. 斜里町・羅臼町委託事業

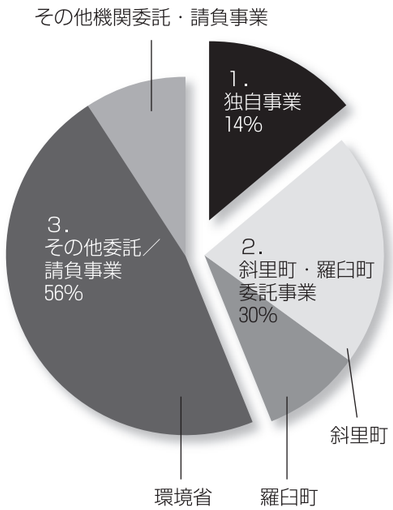
（事業数13 事業費9千623万円）

斜里町からは、知床自然センターや知床自然教育研修所などの指定管理業務やしれとこ100平方メートル運動の現地業務などを受託し、羅臼町からは羅臼ビジターセンターやルサフィールドハウスの運営業務を受託しました。また両町からヒグマ管理対策業務、自然環境保護管理対策業務をそれぞれ受託しました。

3. その他委託／請負事業

（事業数27 事業費1億7千882万円）

環境省やその他機関から、各種業務を受託しました。



2014年度の決算報告

科目	金額
Ⅰ 一般正味財産増減の部	
1. 経常増減の部	
(1)経常収益	
基本財産受取利息	11,250
事業費収益	275,051,122
寄附金	22,584,331
普及研修費収益	19,258,230
その他の事業費収益	255,495
雑収益	2,934,987
経常収益計	320,095,415
(2)経常費用	
事業費	319,992,332
管理費	2,626,858
経常費用計	322,619,190
当期経常増減額	▲ 2,523,775

科目	金額
2. 経常外増減の部	
(1)経常外収益	
その他特別収益	0
経常外収益計	0
(2)経常外費用	
経常外費用計	0
当期経常外増減額	0
当期一般正味財産増減額	▲ 2,523,775
一般正味財産期首残高	80,645,308
一般正味財産期末残高	78,121,533
Ⅱ 指定正味財産増減の部	
受取指定寄附金	7,400,000
一般財産へ振替寄付金	▲ 10,412,000
当期指定正味財産増減額	▲ 3,012,000
指定正味財産期首残高	54,689,000
指定正味財産期末残高	51,677,000
Ⅲ 正味財産期末残高	129,798,533

web http://www.shiretoko.or.jp/about/outline/teikan

2014年度の賛助会の状況

知床財団の活動は、賛助会員をはじめとする多くのサポーターの皆様に支えられています。2014年度は新たに125名、8団体の皆様にご入会いただきました。皆様の温かいご支援に対しまして心から厚く感謝と御礼を申し上げます。

なお、知床財団への会費は、所得税、住民税、及び相続税における優遇措置の対象となります。詳しくは知床財団ホームページ、または税務署にお問い合わせください。

URL http://www.shiretoko.or.jp/supporter/zei/

（1）2014年度の会員数

個人年会員	個人終身会員	法人年会員	法人特別年会員
619名	1,057名	36団体	7団体

（2）新規入会

個人年会員110名、個人終身会員15名、法人年会員6団体、法人特別年会員2団体の入会がありました。私たちの活動をご支援いただき、深く感謝申し上げます。

（以下、敬称略）

法人年会員	所在地
知床観光協会	東京都
小野建設工業株式会社	北海道（羅臼町）
有限会社 丸大阿部商店	北海道（羅臼町）
株式会社 ケミクル	北海道（羅臼町）
シティ環境株式会社	北海道
知床ガイド協議会	北海道

法人特別年会員	所在地
富士化学工業株式会社	北海道
株式会社 四ツ葉トレイド	福岡県

2014年度の賛助会の状況

（3）法人特別年会員

法人名	所在地
三井商船フェリー	東京都
シーライヴ株式会社	大阪府
エース株式会社	東京都
光和メディカルクリニック ヘルスケアセンター	東京都
ナチュラル株式会社	福岡県
【新】富士化学工業株式会社	北海道
【新】株式会社 四ツ葉トレイド	福岡県

※【新】は2014年度の新規入会法人

（4）法人会員一覧

法人名	所在地
知床グランドホテル	北海道
オリジナル設計株式会社	北海道
株式会社 ユートピア知床	北海道
株式会社 須田製版 釧路支店	北海道
有限会社 しれとこ村つくだ荘	北海道
有限会社 アウトバック	岩手県
武庫川女子大学附属高等学校	兵庫県
知床オプショナルツアーズ	北海道
有限会社 みさき水産	北海道
有限会社 赤岩水産	北海道
羅臼漁業協同組合	北海道
ウトロ漁業協同組合	北海道
知床ナチュラリスト協会	北海道
オコツク漁業生産組合	北海道
株式会社 辻中商店	北海道
有限会社 木切別漁業	北海道
峯浜水産有限会社	北海道
株式会社 リリーネット	広島県
医療法人 慈久会 旭が丘ファミリークリニック	三重県

法人名	所在地
有限会社 知床ネイチャークルーズ	北海道
有限会社 らうす第一ホテル	北海道
株式会社 秀岳荘	北海道
株式会社 フェニックス	東京都
小川建設株式会社	北海道
広島フットケア	広島県
株式会社 大石アンドアソシエイツ	東京都
株式会社 スタンフット	東京都
ピックス株式会社	北海道
民宿 鷲の宿	北海道
田島公認会計士事務所	東京都
サージミヤワキ株式会社	東京都
株式会社 小柳中央堂	北海道
【新】知床観光協会	東京都
【新】小野建設工業株式会社	北海道
【新】有限会社 丸大阿部商店	北海道
【新】株式会社ケミクル	北海道
【新】シティ環境株式会社	北海道
【新】知床ガイド協議会	北海道

※【新】は2014年度の新規入会法人

2014年度の寄附状況

一般寄附としてお寄せいただいた件数は78件、総額5,250,539円にのぼりました。内、個人の方からは70件、法人からは8件でした。寄附の用途を特定する指定寄附としてお寄せいただいた件数は3件（個人の方から1件、法人から2件）、総額7,400,000円のご寄附をいただきました。ご支援いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。

（1）一般寄附をいただいた法人

法人名	金額(円)
ブラックダイヤモンドジャパン	2,136,000
アサヒビール株式会社	1,000,000
知床観光協会	180,000
株式会社 フェニックス	373,634
知床オプショナルツアーズ	30,000
有限会社 アウトバック	10,000
知床ガイド協議会	150,000
株式会社 ケミクル	28,800

（2）指定寄附をいただいた法人

【ダイキン工業株式会社　寄附額：6,300,000円】

ダイキン工業株式会社様より知床財団・斜里町・羅臼町に対し、5年間で総額1億1千万円のご寄附をいただく四者協定は4年目を迎えました。2014年度も、知床財団は斜里町・羅臼町と協力しながら以下2つの事業を実施しました。

・「カツラの森、命あふれる川の復元」事業（P38参照）
・「知床の人とヒグマの共存」事業（P29参照）

【北日本新聞社　寄附額：100,000円】

北日本新聞社様より羅臼昆布を育む海の保全活動に対し、ご支援をいただきました。

公益事業 普及啓発事業

▲ウトロ小学校付近での野外授業

▲知床キッズの夏キャンプでの火おこしの様子

地域向け環境教育業務

斜里町

斜里町では、ウトロ小中学校全児童生徒を対象にヒグマ授業を計3回、川上小学校の全児童を対象にヒグマ授業を1回実施しました。また、ウトロ小学校の総合学習の一環として、秋から冬にかけて1～2年生、3～4年生、5～6年生を対象とした環境教育授業をそれぞれ実施しました。

▲ウトロ小学校でのヒグマ授業

羅臼町

羅臼町では、中学校・高校一貫教育のカリキュラムとして継続して行っているヒグマ授業を、計5回実施しました。中学1年生、中学3年生、高校2年生の全生徒を対象に、各学校に出向いて授業を行っています。また、羅臼町内の全幼稚園でも2013年度に引き続き実施しました。また、春松小学校5年生を対象にしたクマ学習も行いました。

羅臼中学校2年生の総合学習の時間では、「ふるさと調べ学習」の講師として知床の生き物に関する授業を2回実施しました。

羅臼町公民館などと共に羅臼町内の小学4～6年生を対象に実施している知床キッズ（羅臼町ふるさと体験教室）は、5月から2月までの間に計10回の講座を企画・実施しました。また、ウトロの知床自然愛護少年団との交流事業を企画、実施しました。プログラムは羅臼とウトロでそれぞれ実施し、6月には羅臼から船に乗り知床岬へ出かけてゴミ拾い活動を行いました。7月には、ウトロのチャシコツ崎で潮だまりの生き物を観察しました。

▲羅臼幼稚園でのヒグマ授業

地域向け講座、イベント

2013年度に新しい試みとして実施した「クマ端会議」を、今年度も開催しました。知床財団が行うヒグマ対策活動に対し、地域の理解と協力を得ることを目的に、お茶とお菓子をいただきながら職員とウトロ住民の方々とが直接意見交換をしました。ヒグマ対策についての疑問や質問、意見など、ウトロ住民の生の声がたくさん飛び交う場となりました。

▲「クマ端会議」の様子

学習教材開発・運用業務

2014年度、ヒグマ学習教材トランクキットの貸出し実績は15件となりました。貸出し出張期間以外では、職員がヒグマ授業や広報イベント、知床自然センター内での観光客向けレクチャー、町民への普及活動などに活用しています。海獣版のトランクキット作成プロジェクトは、昨年に引き続き作業を進めています。

▲トランクキットを使ってレクチャーする職員

▲インターンによる羅臼湖巡視

▲ボランティアの方によるトドマツ苗の移植

職員研修

9月13日、日本ファンドレイジング協会が主催する「准認定ファンドレイザー必修研修」に職員2名が参加しました。今後の賛助会員拡大や寄附獲得に活かすためのツールや戦略づくりなどに役立てています。

自然環境の解析や情報発信に活用が期待されている地理情報システム(GIS)の技術習得に取り組んでおり、9月25日に札幌で開催されたGISコミュニティーフォーラムに2名、12月4、5日に知床博物館で開催された講習会に職員3名が参加しました。

▲准認定ファンドレイザー必修研修

ボランティア活動の推進

（1）ボランティア参加者

2014年度のボランティア登録者数は161名となりました。「100平方メートル運動の森・トラスト」の現場での森づくり作業や羅臼ビジターセンターを拠点にした展示物作製作業などに道内外から28名の参加がありました。総活動日数は62日間、のべ参加人数は110人におよびました。

（2）ダイキンボランティア

ダイキン工業株式会社様からのご支援の一環として、5月と9月に社員ボランティア計22名の方々にお越しいただき、それぞれ3泊4日の日程で森づくり作業のお手伝いをしていただきました。5月は岩尾別川の河畔林再生を目的としたカツラ苗の植樹作業を、9月は同じく岩尾別川沿いにて防鹿柵の設置作業を行いました。

▲ダイキン工業株式会社の社員によるボランティア

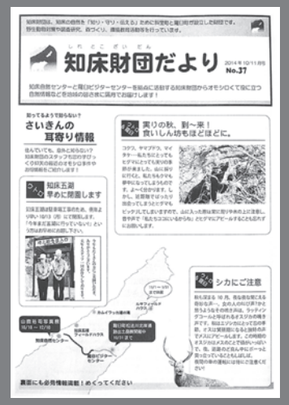
人材育成・就業体験の受け入れ

環境教育や調査研究、公園管理の現場で活躍する人材の教育、育成のため、インターンシップ（就業体験）の受け入れを行いました。主に野生動物や環境保全を専攻する全国の学生から応募があり、夏冬合わせて9教育機関よりのべ14名の受け入れを実施しました。夏のインターンシップに参加した学生のうち2名が、冬のインターンシップにも参加、体験の内容にも手ごたえを感じています。また、羅臼町の中学校、高校の生徒の職業体験についても受け入れを実施しました。

受入先（夏期）	人数
東京農工大学	2
日本大学	2
信州大学	1
長野県林業大学	1
北海道大学	1
神戸動植物環境専門学校	1

受入先（冬期）	人数
玉川大学	1
東海大学	1
東京農工大学	1
北海道大学	1
東京農業大学	1
長野県林業大学校	1

▲インターンによるレクチャー



▲知床財団だより

▲知床自然センターだより

▲旭山動物園の図書スペースでの知床財団コーナー

情報発信・サポーター拡大業務

（1）地域向けの情報発信

地元の方々に知床財団の活動を知ってもらうため、知床財団の活動、イベント情報、旬の自然情報を掲載した「知床財団だより」を2ヶ月に1回発行し、斜里・羅臼両町の広報誌に折り込みました（各回の発行部数：斜里町5,050部、羅臼町2,050部）。

また、知床自然センターの展示やイベント、最新の取り組みを紹介する「知床自然センターだより」を作成し、ウトロの宿泊施設及び観光関係施設（全27施設）に計6回配布しました。

（2）旅行者向けの情報発信

観光客を対象とした知床財団のPRや賛助会員獲得に向けた広報を展開しています。2011年の夏より、SEEDSや賛助会員募集パンフレットをウトロ市街地や羅臼町内の旅館やホテルに置かせていただいています。

包括的な協定を結んでいる旭川市旭山動物園には、知床財団の活動紹介パネル等が展示されています。また、園内図書館には賛助会員募集のパンフレットやSEEDSのバックナンバーファイルが設置されており、知床財団活動のPR、賛助会員獲得に向けた広報にご協力いただいています。

（3）ホームページ

知床財団の活動に対する理解と支援の輪を広げるための「伝える活動」として、ホームページでの情報発信を継続して行っています。知床財団と知床自然センターのホームページをそれぞれ独立させてから2年が経ち、各ホームページに特化した内容を効果的に発信することができるようになり、主要な情報発信ツールとなっています。2014年度は閲覧者にとってより使いやすいサイトとなるよう、細かな修正を行いました。また、知床財団が行うヒグマ対策についてホームページ上でわかりやすく紹介できるように、掲載内容の検討を行いました。

（4）賛助会の運営

賛助会員向けの会報誌『SEEDS』（以下、SEEDS）を4回発行し、会員の皆様や関係機関の方へ発送しました。

▲賛助会員向け
会報誌「SEEDS」

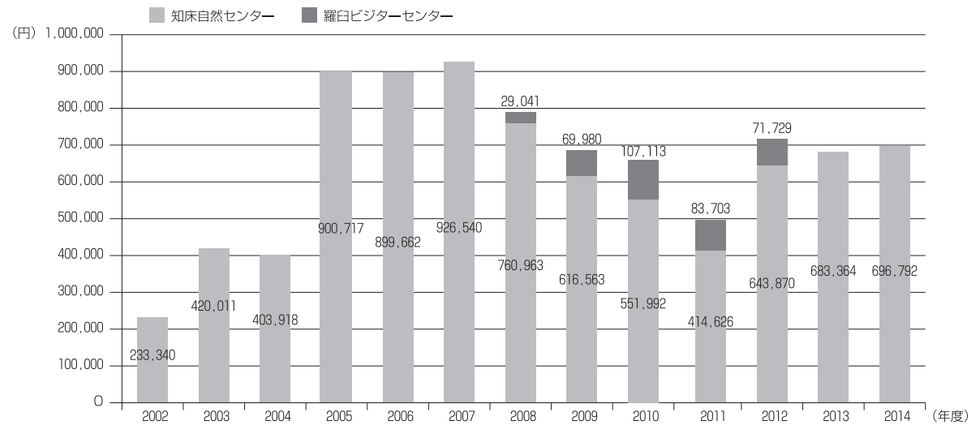
（5）寄附拡大推進事業

知床財団の活動をひろく一般の方や企業へPRし寄附拡大へとつなげるため、東京で開催された国内最大級の環境イベント「エコプロダクツ2014」に出展しました。エコプロダクツへの出展は、昨年に引き続き2年目です。開催期間3日間の総来場者数は、16万人を超えました。イベントでは、活動内容を分かりやすく伝えるための資料を新たに作成して設置したり、SEEDSのバックナンバーを使って来場者へ活動の紹介をしたりするなど、知床財団の知名度の向上と活動への理解に努めました。またブース内に設置した募金箱には、来場者の方から54,274円のご寄附をいただきました。

知床自然センター・羅臼ビジターセンターの館内展示や知床財団ホームページでは、賛助会員募集や寄附の呼びかけ、寄附のお礼の掲載などを行いました。また、地元への活動のPRの場として町内のイベントに出展し、知床財団の活動内容の普及に努めました。

▲エコプロダクツ2014の知床財団ブース

募金箱への寄附額の推移



▲知床自然センター館内の柱展示で遊ぶ来館者

▲ヒグマえさやり禁止キャンペーンのメッセージボード

▲ひき語りでレクチャーを行う職員

ＪＢＮ業務

日本クマネットワーク（JBN）からの受託業務として、JBN会員向けニュースレター「Bears Japan」の発行・発送、「ヒグマとの遭遇回避と遭遇時の対応に関するマニュアル」の発行・販売、JBNホームページの運営管理を行いました。

日本クマネットワークは、個人や地域ごとの単独の活動だけでは難しい全国レベルの諸問題や国際問題に関し、必要に応じて社会に対して働きかけを行い、人とクマのより良い関係を構築する活動を行っているNGO組織です。会員は専門家やクマに関心を持つ一般市民、およそ350名で構成されています。JBN会員向けニュースレター「Bears Japan」を計3回、975部を印刷発行し、会員に向けて発送しました。また、「ヒグマとの遭遇回避と遭遇時の対応に関するマニュアル」については、店頭及び通信販売を通じて計66部を販売しました。ホームページについては、日常的な掲載内容の更新を中心に、幅広い運営業務の掲載をJBN事務局と連携して実施しました。

日本クマネットワーク Web http://www.japanbear.org/cms/

講座・イベント運営

11月1日、 知床国立公園50周年を記念し、知床自然センターでシンポジウムが開催され、事前広報資料と当日配布パンフレットの作成、講師招聘、当日の運営業務を行いました。知床財団の独自の取り組みとしては、シンポジウムのパネリストとして2名が参加したほか、休憩時にダイナビジョン館でレクチャーを実施しました。また、知床の山と海の幸をふんだんに取り入れた昼食をビュッフェスタイルで提供するフレンチレストランをプロデュースしました。

▲知床自然センターでのフレンチビュッフェ

ビジター向けインフォメーション・環境教育業務

（１）知床自然センター

情報提供と館内展示

インフォメーションカウンターにて自然情報の提供やルール・マナーの普及に努めました。また、フレペの滝遊歩道及び知床自然センター周辺における自然情報収集を定期的に実施し、インフォメーション業務や自然情報ブログ、館内展示に積極的に反映させました。自然情報ブログではリアルタイムな開花情報を公開し、館内には新たな展示物として花暦を作成、展示しました。また、職員手作りの自然紹介コーナーである「柱展示」を新たに4作品作成し、1月30日から公開しました。

夏期には、知床ヒグマえさやり禁止キャンペーン企画実行委員会主催による普及企画の一環として、来館者がメッセージを書き込む特設展示を作成し、241名が参加しています。また、館内にモニターを設置し、知床財団作成の絵本「しれとこのきょうだいヒグマ ヌプとカナのおはなし」を朗読付きで常時上映し、人馴れグマを生み出さない行動することの重要性を発信しました。

▲知床自然センター内の花ごよみ展示

レクチャーの実施

ゴールデンウィークや夏休み期間中、知床の自然の魅力や課題を分かりやすく伝えるミニレクチャーを28回実施し、415人の参加がありました。その他、職員が日ごろ撮りためた写真や動画を使ったスライドレクチャー、観光船欠航時や荒天時などの館内混雑時に、館内の展示物を利用して行うゲリラレクチャー、ヒグマに関する展示物を細かく紹介する館内ツアーなど、様々な形でレクチャーを行いました。

ロビー寄附

知床自然センター館内における募金獲得強化に取り組みました。ゴールデンウィークと夏休み期間中に毎日実施したミニレクチャーや繁忙時に行う館内ゲリラレクチャーでは、知床の自然の素晴らしさを紹介すると同時に、知床財団の活動を紹介して積極的に募金を呼びかけました。この他、シカ角の破片やダイナビジョンフィルムを加工したハンドメイドのしおり等を置いて、募金のお礼の品としました。その結果、2014年度は619,956円の募金をいただきました（前年度比90.72%）。

▲羅臼ビジターセンター館内でのレクチャー

▲ルサフィールドハウス内の昆布展示

ビジター向けインフォメーション・環境教育業務

（2）羅臼ビジターセンター

来館者に対し、施設周辺の自然情報やヒグマに関する注意喚起、野生動物に接する際のルールとマナーなどを説明するミニレクチャーを実施しました。ミニレクチャーでは、展示などを活用したストーリー性のある自然解説が好評でした。野生動物の生態や生活史はもちろん、近年顕在化している餌付けや餌やりの影響など、人間の行動に起因する課題も取り入れて、奥行きを持たせたものにするよう努めました。実施は、特に来館者が多く見込める夏休み期間に集中して行い、計14回、315名の方に参加いただきました。

（3）ルサフィールドハウス

知床半島中央部地区及び先端部地区利用者に対し、立ち入る際の留意事項と禁止事項等についてレクチャーを実施しました。一般来館者へは館内展示を活用しながら、数多くの鯨類が利用している羅臼の海の豊かさ、昆布漁等について解説を実施しました。

（4）知床五湖フィールドハウス

知床五湖利用調整地区の指定認定機関として4月から10月まで職員が常駐しました。散策路の自然環境や位置関係が一目でわかるように園地全体のジオラマを館内に設置し、利用制度の説明や遊歩道の状況、自然情報の提供に活用しました。また、来館者の多様なニーズに対応するため、制度案内の英語表記ポスター、知床半島とその主要拠点を示した観光地図や、等身大のヒグマ展示などを新たに作成し、情報提供の強化に努めました。

また、知床ガイド協議会と協力し、ガイドツアー情報や当日のツアー参加希望者への案内サービスを充実させました。

なお、知床五湖園地は例年11月下旬ごろまで開園していますが、2014年度は駐車場拡張工事のため、10月13日で早期閉園となりました。

▲知床五湖フィールドハウス内の等身大ヒグマの展示

知床自然センター内外刷新業務

10月14日から31日までの期間、ホロベツ地区の魅力アップとしれとこ100平方メートル運動地の公開を目的に複数の遊歩道（トレイル）を試験的に設置する社会実験を実施しました。遊歩道はすべて100平方メートル運動地内に設置し、名称を「森づくりの道」としました。最も長いロングコースは5kmほどの距離がある本格的なトレッキングコースとなりました。また、知床自然センターでは散策前の事前レクチャーを定期的に行い、ヒグマに関する安全対策や100平方メートル運動の普及を図る取り組みを行いました。期間中、500名以上の利用者が新コースを散策し、幌別地区の歴史と自然保護の歩みを伝える取り組みとして好評を得ることができました。

なお、知床自然センター内のトイレ改修工事が1月から2月にかけて行われ、2月25日から新しくなったトイレの利用が始まりました。

▲散策前にレクチャーを受ける利用者

▲社会実験のために新設された遊歩道

▲リニューアルされた知床自然センター館内のトイレ

公益事業 施設管理系事業

▲水源地の点検作業

▲羅臼町民向けの自然観察会の様子

知床自然センター等管理運営業務

（1）知床自然センター

知床自然センター及び周辺施設の維持管理、映像展示館（ダイナビジョン館）の運営と料金徴収などの業務を行いました。2014年度の知床自然センター入館者数は170,321名で、前年度比110.3%となりました。映像展示館入館者数は20,541名（前年度比117.3%）、売上は7,319,845円（前年度比116.2%）でいずれも前年値を上回りました。

（2）知床自然教育研修所

ボランティアやインターン、外部研究者が活動する際の拠点となる知床自然教育研修所の維持管理を行いました。2014年度はのべ253名(1,229人泊)の利用がありました。また、知識の習得や技術の向上を図り、学際的な交流を進める「しれとこゼミ」の会場としても活用されました。

（3）知床五湖園地

ヒグマに対する安全管理や駐車場でのオートキャンプ等の不適切な利用を防止するため、知床五湖園地の夜間閉鎖を実施しました。また、知床五湖園地への給水設備の維持管理を行っています。4月上旬に水源地から園地までの通水作業を行い、11月中旬に停水するまでの間、事業を実施しました。

羅臼ビジターセンター管理運営業務

羅臼ビジターセンターの来館者数は35,336名（前年度比102%）でした。例年開催している自然観察会を4回、特別展示を7回開催しました。自然観察会には羅臼町民を中心に各回5名前後の参加者がありました。館内での自然に関する解説や情報提供等に活用するため、知床国立公園内の羅臼町側の主要な利用拠点（羅臼湖、羅臼岳・知床連山、熊越えの滝、羅臼温泉園地等）の巡視を行い、自然情報、利用状況や野生動物の生息状況等の情報収集に努めました。

ルサフィールドハウス管理運営業務

4月1日から10月31日、及び2月1日から3月31日に開館し、施設の管理運営を実施しました。9ヶ月間の開館日のうち、計19日（終日12日、時間閉鎖7日）が台風や暴風雪のため臨時休館となりました。来館者数は6,275名（前年度比97%）でした。知床半島先端部地区へ立ち入る利用者に対しては、引き続きルールを含めた最新情報や留意点等について、1回につき30分から40分程度のレクチャーを実施しました。2014年度は、29名に対し15回のレクチャーを行いました。

▲ルサフィールドハウスでのレクチャー

公益事業

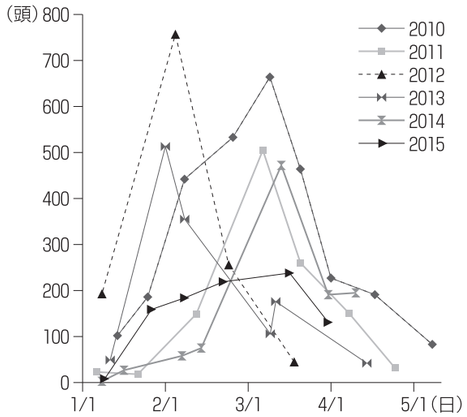
調査研究・野生動物対策事業

▲GPS首輪を装着されたエゾシカ（標識：13AD03）

▲GISによって作成された13AD03の位置を示した地図

エゾシカ個体群の動態に関する調査

知床半島内の重要なエゾシカ越冬地の一つとなっている斜里町真鯉地区において、国道上からのエゾシカ日中カウントを冬期間に計6回実施しました。シカの確認頭数は3月中旬が最多となり、238頭でした。最大確認頭数は2012年度が517頭、2013年度が472頭だったため、同地区のシカは依然高密度状態を維持しているものの、減少傾向と考えられます。なお、鳥獣保護区外での発見割合は、2月末に狩猟期が終了した後、急増していました。また、エゾシカ捕獲事業が、エゾシカの行動に与える影響を把握するため、2012年度の冬にGPS首輪を装着した個体（メス成獣1頭）の追跡を引き続き実施しました。斜里町側の幌別ー岩尾別地区で捕獲されたこの個体は、2年連続で盛夏に標高の高い場所へ移動していました。



真鯉地区の国道沿い（約 8.5km 区間）でカウントされたエゾシカの数

幌別ー岩尾別地区におけるヒグマの生態等に関する調査

2014年度は秋にドラム缶式オリ（ワナ）によるヒグマの生体捕獲を試みましたが、捕獲できませんでした。しかしワナに仕掛けていた自動撮影カメラにより、前年度追跡していたメス成獣1頭（13B03）が子グマを連れて行動していたことが確認されました。なお、この個体のGPS首輪は、盤ノ川上流の標高990m地点の冬眠穴入口で脱落しており、7月上旬に回収しました。また、外見のみでは個体識別が曖昧だったヒグマのべ4頭について、麻酔銃による組織採取（ダートバイオプシー）を行ない、遺伝子分析による結果を得ました（北海道大学獣医学部との共同事業）。さらに、有害捕獲等で得られたヒグマの頭骨10個体分について標本を作製しました。

▲冬眠穴で脱落したヒグマのGPS首輪

ルシャ地区におけるヒグマの生態等に関する調査

DAIKIN

斜里町ルシャ地区を利用するヒグマを、目視及び遺伝子分析（分析試料はヘアトラップにより採取した体毛、麻酔銃ダートバイオプシーによる皮膚組織片及び回収した新鮮な糞など）によって個体識別し、個体間の血縁関係やルシャ地区外への移動分散状況などを引き続き調査しました。また、自由に野外を歩き回っている7頭のヒグマを麻酔銃で生け捕りにし、GPS首輪を装着して放獣しました。なお、2014年度に斜里町と羅臼町で捕獲されたヒグマ19頭のうち、2頭がルシャ生まれの若いオスでした。本調査は、ダイキン工業株式会社様との協定に基づく知床財団の独自事業として、斜里町立知床博物館及び北海道大学獣医学部と共同で取り組んでいます。

▲GPS首輪を装着されたヒグマ

▲体毛を採取するためのヘアトラップに侵入したヒグマ

知床岬の漁業者の暮らしと生き物を守る電気柵導入実験

知床岬先端部の斜里側文吉湾と羅臼側赤岩地区の漁業番屋へは、ヒグマが出没してもすぐに駆けつけることができないため、人の安全対策に苦慮していました。そこでアサヒビール株式会社様からの支援により、ヒグマを近づけないための電気柵を2012年から設置しています。2014年度、文吉湾では冬の間撤去していた電気柵を5月30日に再設置し、9月29日に撤去しました。赤岩地区でも、昆布漁期に合わせて7月5日に再設置し、8月30日に撤去しました。ヒグマは、電気柵を忌避する一方で、昆布番屋周辺から離れないような行動をとる個体が観察されました。

▲赤岩地区の電気柵設置

▲ドローンで撮影された羅臼沖を遊泳するトドの群れ

▲陸からトドを観察する職員

希少鳥類などの長期モニタリング

知床のオジロワシの繁殖状況調査に関わる調査員によって構成されている「オジロワシ長期モニタリンググループ」の事務局を引き続き担当し、情報の集約と会議運営を行ないました。知床財団が調査を担当している営巣木については、当年の営巣の有無や巣立ち幼鳥数などについて調査や情報収集を実施しました。また、冬期のオジロワシ・オオワシの飛来状況の長期変動傾向を把握するため、羅臼町の海沿いでカウント調査を実施しました。

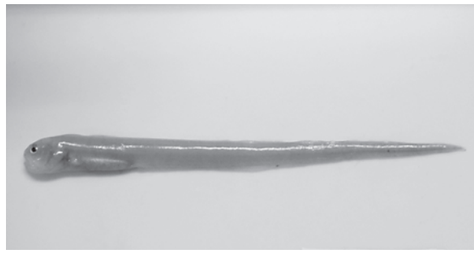
▲オジロワシ

海生哺乳類のモニタリング

冬期にトドの来遊海域となっている羅臼町から標津町北部にかけての沿岸において、陸上の定点からのカウント調査を引き続き実施しました。2014年度冬期の最大確認頭数は、2015年1月26日の103頭でした。前年度までと同様に、中部千島生まれの標識個体が多数確認されました。また、ドローン（無人航空機）による遊泳群の上空からの撮影も3日間試行的に実施しました。ドローンが飛行可能な風のない時に限られますが、群れ構成や標識個体を従来よりも比較的短い時間で、効率よく把握できることがわかりました。

水域における生物群集のモニタリング

漁業が盛んな羅臼沖深海域の生物相を把握するため、海洋深層水の汲み上げ施設で2013年度に引き続き、生物を収集しました。収集した生物のうち、特に貝類について学会発表と学術誌掲載へ向けた同定作業を進めました。また、2012年に国後島と択捉島で採集した魚類と貝類についても同定を進め、学会発表に向けた準備を進めました。


▲北海道の太平洋岸、オホーツク海とベーリング海の深海に生息する珍しいアカゲンゲ

学術的な交流と成果公表

学会口頭発表

■ 知床岬のトリ事情シカ事情ーシカによる草地景観の改変と鳥類相変化ー
上原裕世（酪農大院）・石名坂豪（知床財団）・田澤道広（羅臼町）・中川元（知床博）・吉田剛司（酪農大）
日本景観生態学会　金沢市地場産業振興センター（金沢）　2014年6月

■ 知床半島ルシャ地区におけるヒグマの繁殖様式に関する研究
下鶴倫人・森脇潤（北大獣医）・山中正実（知床博）・中西將尚・石名坂豪・葛西真輔・能勢峰・増田泰（知床財団）・坪田敏男（北大獣医）
日本獣医学会　北海道大学（札幌）　2014年9月

■ エゾシカの個体数変動に伴う体重と体サイズの変化
邑上亮真（東京農工大）・能勢峰・石名坂豪・増田泰・中西將尚（知床財団）・岡田秀明（斜里町）・山中正実（知床博）・梶光一（東京農工大）
日本生態学会　鹿児島大学（鹿児島）　2015年3月

▲川辺に残されたカワウソの尾の跡

学会ポスター発表

■日本に生息する猛禽類における鉛汚染状況の解析
石井千尋（北大獣医）・池中良徳・中川翔太・水川葉月（北大獣医）・齊藤慶輔・渡邊有希子（猛禽類医学研究所）・田辺信介・野見山桂（愛媛大）・林光武（栃木県博）・増田泰（知床財団）・坂本健太郎・石塚真由美（北大獣医）
日本毒性学会　神戸コンベンションセンター（神戸）　2014年7月

■レーザーアブレーション誘導結合プラズマ質量分析による野生動物の食性解析の可能性
中下留美子（森林総研）・大石昌弘（㈱ＴＤＫ）・鈴木彌生子（食総研）・小林喬子（自然研）・伊藤哲治（㈱ＷＭＯ）・増田泰（知床財団）・大泰司紀之（北大）・佐藤喜和（酪農大）
日本哺乳類学会　京都大学（京都）　2014年9月

■Species composition of grassland songbirds in hyper-abundant deer landscape.
Hiroyo Uehara, Hajime Nakagawa, Michihiro Tazawa, Tsuyoshi Ishinazaka, Tsuyoshi Yoshida
The Wildlife Society annual conference 2014 Pittsburgh, PA, USA.　2014年10月

学会シンポジウム

■環境変化が野生動物へ与える影響
増田泰（知床財団）　公衆衛生分科会・野生動物分科会ジョイントシンポジウム「環オホーツクにおける環境変化が野生動物と人に及ぼす影響」
日本獣医学会　北海道大学（札幌）　2014年9月

知床ゼミ

■外部研究者や当財団職員を発表者とした勉強会（ゼミ）を計10回開催しました。職員や関係機関等を含め、のべ150名ほどの参加がありました。

紀要・報告書

■馬谷佳幸，松林良太，増田泰（2014）知床半島岩尾別川及び幌別川におけるサクラマス個体群の現状－100平方メートル運動の森・トラストでの生物相復元の取り組み.知床博物館研究報告37: 21-32.

シホテ・アリンとの世界遺産交流

DAIKIN

2014年9月に、ロシア沿海州及びハバロフスク地方でユーラシアカワウソの調査を実施しました。その際、シホテ・アリン自然保護区（世界自然遺産）の中でも調査や職員の方々との交流を行ないました。また、学術協力のための協定書を取り交わしました。なお、この調査はダイキン工業株式会社様からいただいた寄附金により実施しました。

▲ロシアでのカワウソ調査

知床GISデータベースの作成

知床半島の自然情報、位置情報をベースとしてあらゆるデータを取りまとめるGISデータベースの構築を進めています。2014年度は、9月に札幌で開催されたGISコミュニティーフォーラムにおいて情報収集を行い、その結果をもとにGISデータベースの設計、GISデータの作成、テストサイトの作成を行いました。

羅臼町におけるオオセグロカモメ生態調査

人家の屋根等で営巣して糞や騒音が問題となっている羅臼町のオオセグロカモメについて、営巣数調査や行動追跡調査等を実施しました。営巣数調査では、321巣を人家の屋根で記録しました。また行動追跡調査では、成鳥と幼鳥の計62個体に足環を装着し、うち色つきの足環で標識した30個体の目撃情報を収集しました。その結果、繁殖が終わった9月以降に羅臼町内ローソク岩や羅臼漁港付近で5個体の目撃があった他、11月に網走まで移動した個体がいることがわかりました。

▲屋根に営巣するオオセグロカモメを観察する職員

▲国立公園内の国道付近に出没したヒグマ

▲羅臼町内に出没したヒグマを追い払う職員

ヒグマ対策手法の開発

2013年度に引き続き、頻繁に目撃される個体ヒグマが同じ個体か判断するための簡易な標識付け手段として、ヒグマを着色する方法を検討しました。今年度は、スリングショット（パチンコ）でペイントボールを発射することは可能か、また、動物に直接当てることで着色させられるかを試行しました。ペイントボールはスリングショットで発射可能なことが確認されましたが、動物に直接当てるのではなく、動物の近くの硬いものに当てて破裂させた方が着色させやすいことが分かりました。

ヒグマの管理対策

斜里町

2014年度のヒグマ目撃件数は785件、対策活動が651件で、近年では平均的な年でした。ただし4月のみで目撃件数が100件を越え、早春からヒグマの活動が活発だったのが特徴的でした。ヒグマによる人身事故は発生しませんでしたが、2013年度に国立公園内において常態的に写真撮影の対象となって人慣れが進行したと考えられる複数の個体が、国立公園外の住宅付近にも出没しました。最終的に、このうちの1頭が国立公園外で有害捕獲となりました。また、岩尾別台地の道道沿いには0歳の子グマを3頭連れた大型の母グマが頻繁に現われ、人間に対して威嚇突進を繰り返す危険な状況が発生しました。各地区の農地では6月中旬以降に作物被害が発生し、計7頭が有害捕獲となりました。

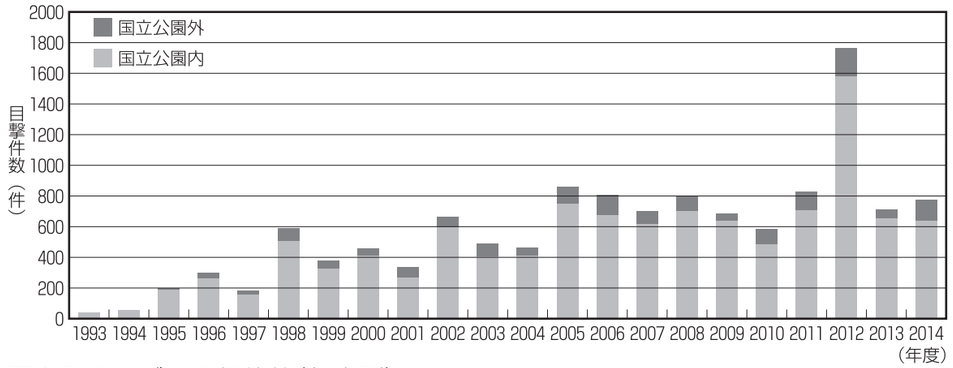
▲ヒグマにかじられた農作物のビート

羅臼町

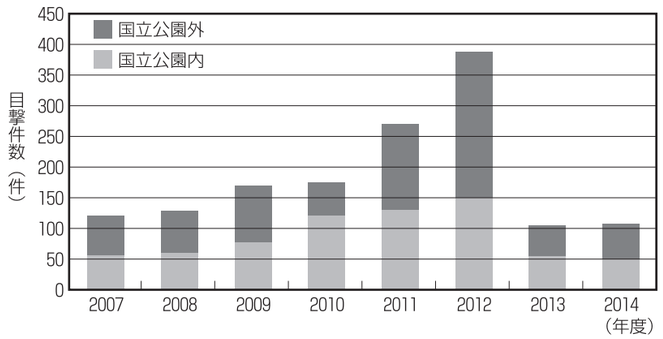
2014年度のヒグマ目撃件数は108件、対策活動は110件でした。どちらも前年度から若干増加しました。また、有害捕獲頭数は5頭でした。ヒグマの目撃及び対策活動件数は、詳細な統計をとり始めた2007年度から増減を繰り返しながら徐々に増加しており、2012年度に過去最多となりましたが、2013年度に急減し、2014年度についてもほぼ同水準で横ばいでした。

月別では、7月に最も多くの目撃があり、対策活動についても同じく7月が最多となりました。これは、住宅地に出没したヒグマへの対応や、市街地周辺に夜間出没したヒグマへの対応が多かったためでした。

斜里町のヒグマ目撃件数（年度別）



羅臼町のヒグマ目撃件数（年度別）



▲保護されたオオワシを放鳥する職員

▲交通事故死したアトリ

自然環境管理対策業務

斜里町

ゴミの不法投棄が15件あり、多くは食品の包装や容器などでした。国立公園内では、家電製品（電子レンジ）が不法投棄されていた事例もありました。キツネなど野生動物への餌やり行為は、直接職員が目撃した事例はありませんでしたが、キツネの行動を見る限り未だ無くなっていないと推測され、継続的な普及啓発が必要な状況です。サケ・マスの遡上シーズンになるとオンネベツ川などの河口付近の駐車帯で車中泊をする釣り人が増え、ゴミや糞尿の放置が問題となったため、注意看板を設置しました。なお、2014年度からフンベ川河口の駐車帯にも、幌別川駐車帯と同様に閉鎖期間が設けられました。

▲釣り人への注意喚起看板

野生鳥獣死体の処理対応は55件あり、そのうちエゾシカが20件で最多でした。3月中旬にアトリの交通事故死体が短期間で集中的に回収されたことも特徴的でした。傷病鳥獣については16件対応しました。8月に希少種のオジロワシの幼鳥を一時的に保護収容しました。また11月には、斜里町市街地に迷い込んだトドを関係機関と協力して生け捕り、放獣した事例もありました。

なお、特定外来種であるアライグマの生息情報はありませんでした。

エゾシカの夜間カウント調査は、春期と秋期に各5回、幌別ー岩尾別地区で継続実施しました。

▲エゾシカの夜間カウント調査

▲斜里町内に迷い込んだトド（撮影：岡田秀明氏）

羅臼町

傷病鳥獣の対応は20件ありました。そのうち、希少鳥類のオオワシとオジロワシへの対応が計4件ありました。また、特定外来生物に関する情報収集や捕獲作業を行いました。アライグマの目撃情報は3件ありましたが、捕獲には至りませんでした。

町内各地区で実施した計31回のパトロールでは、路上などに不法投棄された食品系ゴミを複数回発見、回収したほか、国立公園利用者の指導も随時実施しました。

エゾシカの夜間カウント調査は、春期と秋期に各5回、ルサー相泊地区で継続実施しました。

▲岩尾別の仕切り柵内でシカを追い込む職員

エゾシカ関連業務

冬期間、エゾシカ捕獲事業に取り組みました。囲いわなを7基稼働させ、流し猟式シャープシューティング（道路を閉鎖しての誘引狙撃による銃捕獲）を2ヶ所で行ったほか、厳冬期にヘリコプターで知床岬へ行き、仕切柵を利用した巻狩り捕獲を実施しました。記録的な大雪や吹雪に悩まされましたが、囲いわなで310頭、シャープシューティングで74頭、知床岬での巻狩りで66頭の計450頭を捕獲しました。

これらエゾシカ捕獲事業の目的は植生の回復です。エゾシカ捕獲事業の実施地区における植生回復状況を把握するための植物調査についても、知床岬と幌別ー岩尾別地区の一部調査に参加しました。また、ルシャ地区において6〜11月に計10頭のメスジカを麻酔銃で捕獲し、GPS首輪を装着後に再度放獣して行動範囲を調査しました。

▲エゾシカに GPS 首輪を装着する職員

▲シャープシューティングで捕獲されたエゾシカ

外来生物の調査・対策

2014年度は行政からの外来種対策に特化した受託事業はありませんでしたが、国立公園内外における日常的なパトロールの際に、アメリカオニアザミやセイヨウオオマルハナバチを発見した場合は、駆除・捕獲を行ないました。

地域住民とヒグマの安全安心共存プロジェクト

人の生活圏への野生動物の侵入を防止し、住民の安全と安心を確保するために2011年度から羅臼町内の2ヶ所を対象として電気柵の設置を進めています。設置開始から4年目となる今年度は、市街中心部の北側に野生動物対策フェンス及び電気柵を新設しました。

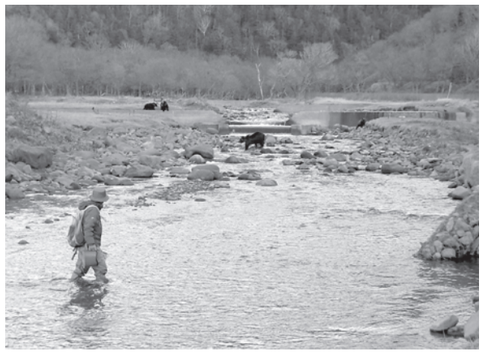
▲野生動物対策フェンスの設置

▲ヘリコプターの機内からエゾシカをカウントする職員

世界自然遺産地域とその周辺における調査業務

サケ科魚類の遡上状況調査業務

知床が世界自然遺産地域に登録されてから改良が進められたダムについて、改良効果を検証するための調査を行ないました。羅臼町の2河川、斜里町の1河川を対象とし、ダムの上流側と下流側とでシロザケとカラフトマスの産卵床数をカウントしました。羅臼町の2河川については改良前よりも上流で産卵床が確認されました。一方で、斜里町1河川については、ダム下流側の河川形状が度重なる増水により変化し、改良後から次第に河床が低くなってしまいました。そのためダムの落差が大きくなり、シロザケが遡上できない状態になっており、ダムの上流側で産卵床を確認することはできませんでした。


▲産卵床調査の様子

海域利用適正化推進業務

知床国立公園やその周辺海域の適正な利用を図るため、当該海域において野生生物ウォッチングを行う観光船に専門家と同乗し、観光船協議会が作成したホエールウォッチング自主ルールの遵守状況や船の運航上の改善点、レクチャーの実施状況等を調査しました。また、関係団体への電話ヒアリングや文献調査を行い、自主ルールを守る仕組みについて国内外の事例を取りまとめました。冬期には、当該海域における観光船によるワシ類への餌付けに関する調査、モニタリング手法の検討及び立案、羅臼の海域利用に関する懇談会の運営を実施しました。調査は、観光船に同乗して行う船上調査と、陸上からのロードサイドセンサスを計6日間行いました。また、「羅臼町の海域に関する懇談会」を1月と2月に1回ずつ開催し、関係者間で意見交換を行いました。

▲ホエールウォッチングの実施状況調査

エゾシカ航空カウント調査業務

遺産地域内でエゾシカの捕獲事業を実施している3地区（知床岬地区、幌別ー岩尾別地区及びルサー相泊地区）と、数年後の捕獲事業実施の可能性を検討中であるルシャ地区において、2015年3月上旬にエゾシカの航空カウント調査を実施しました。積雪期にヘリコプターで低空・低速飛行する方式による調査は、2003年、2011年、2013年、2014年につづき5回目となります。今年度は遺産地域内の上記4地区（計97.4㎢）で811頭のエゾシカを発見しました。これは前年度比で124頭減でした。

▲ヘリコプターから見た知床岬台地上のエゾシカ

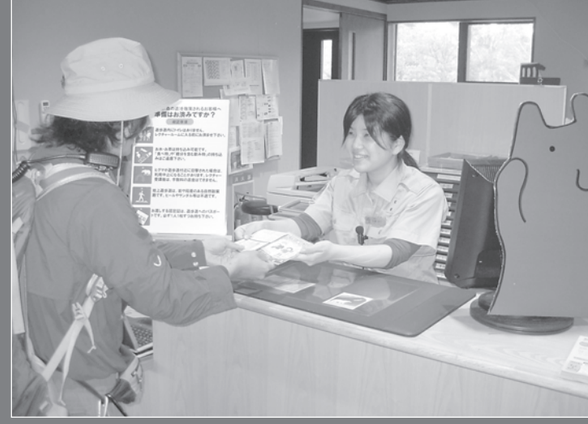
科学委員会等運営業務

知床世界自然遺産地域を適切に管理するために、科学的な見地からの行政への助言が科学委員会やその付属会議によって行われています。知床財団は科学委員会とエゾシカ・陸上生態系ワーキンググループ会議の運営事務局として、日程調整、会場準備、資料作成、議事録作成、地元向けニュースレター作成などを担いました。

▲知床世界自然遺産地域科学委員会の様子

公益事業

公園利用管理事業



▲知床五湖フィールドハウスでの立入認定証の発行

適正利用・エコツーリズム検討業務

適正利用・エコツーリズム検討会議（知床世界自然遺産科学委員会、適正利用・エコツーリズムWGと知床世界自然遺産地域連絡会議、適正利用・エコツーリズム部会の合同会議）では、知床エコツーリズム戦略の本格的な運用が始まっています。地域提案型の利用のあり方やルール作りの仕組みが確立されつつあり、知床財団もこうした取り組みに参画しています。知床エコツーリズム戦略の提案に基づき設置された部会全ての議論に参加しました。また、2014年度は当会議の運営業務を受託し、運営事務局として会議の日程調整、会場準備、資料作成、議事録作成、地元向けニュースレターの作成などを担いました。

また、知床五湖の新たな利用システムを広く地域の皆さんに体験してもらうため、「知床五湖町民ウェルカムキャンペーン」「くまレク見てトクキャンペーン」の2企画を2013年より継続して実施しました。ウェルカムキャンペーンでは、斜里・羅臼の両町民に対し、通年で立ち入り認定手数料を無料化するサービスを知床財団が提供し、今年度は267名の利用がありました。

くまレク見てトクキャンペーンでは、知床五湖の新制度に賛同する協賛店舗を地域から募集し、地上遊歩道の利用者が協賛店舗で特典を受けられるサービスや利用者が店舗をめぐるクイズラリーを企画しました。昨年を大きく上回る35の地元店舗にご協力いただき、3,600人以上の方がキャンペーンを利用しました。

▲立入認定証とくまレク見てトクキャンペーンのパンフレット

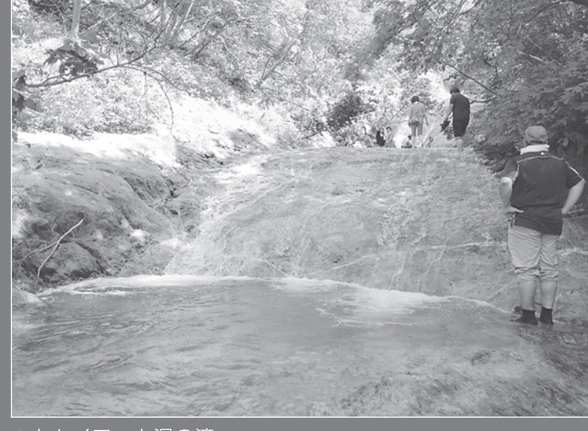
知床五湖利用適正化業務

2011年より開始した知床五湖の利用調整地区制度は4年目を迎えました。新制度はヒグマに関するリスク管理体制、観光地における認定ガイド制度など、様々な面で先進的な取り組みとして注目を集めています。知床財団は制度運営の要となる指定認定機関(環境大臣指定)として制度全体の運用を担っています。

また環境省からの受託事業として、意思決定の場である「知床五湖の利用のあり方協議会」の運営事務局を担い、地域の合意形成に努めたほか、ヒグマによる事故事例の収集や制度を担う登録引率者の募集を強化するためのヒアリング等も行いました。

2014年度はヒグマ活動期の運用が好調でした。期間中、1万人を超える利用者がガイドツアーに参加しており、知床五湖がエコツアーの発信地となりつつあります。ヒグマの出没も少なく、通年の立ち入り認定者数は6万5000人を超えており、安定的な運用が実現できました。

▲知床五湖認定ガイドによるツアー


▲カムイワッカ湯の滝

カムイワッカ地区利用適正化業務

2014年度もカムイワッカ地区は、マイカー規制期間と自由通行期間が交互に切り替わる利用体制となり、現地での混乱を避けるため関係者間の調整が必要でした。同地区で行われているマイカー規制の現地連絡調整業務を自動車利用適正化対策連絡協議会から受託しました。知床五湖フィールドハウスを拠点に、運営の円滑化のためにバス会社や各地に配置された警備員や巡視員との連絡調整、利用状況の調査や利用者への情報提供、ヒグマ出没時の連絡整理、負傷者への対応などを行いました。

特に今年度は、硫黄山登山者（知床連山縦走含む）の遭難による警察等への救助要請が6件発生し、内4件に関し、知床財団が連絡調整と救助の補助対応を行いました。

▲カムイワッカ湯の滝へのシャトルバス

▲知床五湖ーカムイワッカ間の林道での交通事故

幌別地区活用検討業務

1980年代から斜里側の公園利用の拠点として位置づけられてきた幌別地区に焦点をあて、現在知床が直面している課題（アクセス、情報発信、新たな利用エリア）を解決する拠点としての再構築を検討しました。2014年度は、事業の2年目であり、昨年提案した社会実験を実施しました。実験では、知床自然センターを起点としたトレイルの設置やレクチャーによる情報提供を行いました。同業務においては、しれとこ100平方メートル運動地の公開のあり方や幌別地区の国立公園計画への位置付けなどを検討するために、利用者の動態を把握するモニタリング調査やアンケート調査等を環境省の受託事業として実施しました。

ルサ地区活用検討業務

羅臼町のルサ地区には、環境省によりルサフィールドハウスが設置され、先端部利用の拠点として情報提供や安全対策の機能が期待されています。一方、遠隔地に位置するため来館者数は少なく、また冬季の利用が限定されるなどの課題が指摘されています。また、ルサフィールドハウス近傍のルサ川沿いに平坦地が広がっているものの、公園利用上の位置づけはなされていません。

こうした状況に鑑み、ルサ地区に焦点をあて、ルサフィールドハウスとルサ園地のあり方を検討し、具体的な利活用を提案する独自事業を実施しました。検討にあたっては、知床財団職員が2つのチームに分かれ、アイディアをコンペ形式で提案することとしました。3月に実施された理事会を最終発表の場とし、各チームからはキャンプ施設の設置やトレイルの新設、教育利用等多くのアイディアが提案されました。

▲ルサフィールドハウス

公益事業　森林再生系事業

▲森林再生専門委員会議

▲防鹿柵の補修

しれとこ100平方メートル運動森林再生業務

斜里町主催「しれとこ100平方メートル運動」の開始から36年、新運動「100平方メートル運動の森・トラスト」として原生の森の再生に向けた取り組みが始まってから17年が経過しました。知床の森を守り育てる取り組みの中で、知床財団は森づくり作業や森づくりの現場を運動参加者や一般の人々へ公開していく事業など、100平方メートル運動に関わる現地業務を担っています。

（1）森林再生作業

春から夏にかけて苗畑での除草や苗木の根づくりを行ったほか、老朽化が進んだ防鹿柵の改修を行いました。エゾシカの侵入を防ぐ防鹿柵は知床の森づくりにとって重要な役割を果たしています。運動地内にある大小18基の防鹿柵の中は、植樹した苗木や自然に生えてきた木々がその年数の分だけ育っています。その一方、設置から10数年を経過したいくつかの柵は、主に木製の柱の老朽化が進んでいるため、数百本の単位で柱を交換しなければならない時期を迎えています。

このような状況の中、秋には苗畑で育てたミズナラなどの中～大型（樹高5～10メートル）の苗木60本を防鹿柵の内外に移植しました。その内、18本は樹皮保護ネットを巻いて柵のない場所に植え込んでいます。森づくりを行う上で防鹿柵は欠かせない手法のひとつですが、将来的な維持管理のコストを考えるとこれ以上の防鹿柵の拡充には限界があるため、このような柵に頼らない森づくりも進めています。

（2）しれとこの森交流事業

森づくりの現場と運動参加者をつなぐ交流事業として、「第35回知床自然教室」（7月30日～8月5日、参加者33名）、「第18回しれとこ森の集い（植樹祭）」（10月19日、参加者87名）、「第18回森づくりワークキャンプ」（10月30日～11月4日、参加者13名）、の企画・運営を行いました。

これまで「森の集い（植樹祭）」では、片手でも持てるサイズの苗木を数百本単位で防鹿柵の中に植えてきましたが、植樹する面積が限られているため、今回は大きな苗木を数人一組のグループで植える方法を初めて取り入れました。その結果、植樹本数は少なくなりましたが、何本もの大きな苗木を植樹することができました。

▲第35回知床自然教室

（3）森林再生専門委員会議運営

森づくり作業の方針や計画は、動植物の専門家と地元の有識者で構成される森林再生専門委員会議の場で議論が行われ、その方向性などが定められています。知床財団は2014年度の活動の成果と課題をまとめるとともに、2015年度の森づくり作業の具体的な方針や計画案を、斜里町と検討を重ねながら立案しました。

11月に開催した森林再生専門委員会議においては、森づくり作業などの進捗のほか、エゾシカ捕獲の影響と推察される植生の回復が運動地でも見られ始めていることを報告しました。

また、3年後の2017年度には本格的な森づくりの開始から20年の節目を迎えることから、この20年間の総括とともに次期20年間の目標や方向性についての検討を始めました。知床財団はその総括や検討に必要な情報収集として運動地各地の現状確認を進めているほか、GISなどを活用しながら、防鹿柵等の各施設位置や過去の植栽履歴など、これまでの森づくりの結果や知見の取りまとめにも着手しています。

（4）運動地広報企画

100平方メートル運動の広報誌『しれとこの森通信No.17』（A4判カラー12ページ）の企画・編集作業を行いました。また、斜里町民向けに運動の状況を伝えるチラシ『しれとこの森通信ミニ』（季刊）を作成し、斜里町広報誌に折り込み配布も行いました。

2013年度にリニューアルを行った「しれとこ100平方メートル運動ホームページ」（斜里町）上では、日々の作業状況を発信するとともに、イベントやボランティア募集の媒体としても活用しています。

▲しれとこの森通信

▲新たに開設された「しれとこ森づくりの道」

▲「知床森づくりの日」での苗の移植作業

▲カワウソ研究者による知床視察

（5）河畔林と河川の自然再生業務 DAIKIN

岩尾別川沿いの河畔林の復元と河川環境の改善への取り組みの一環として、川沿いの森に新規の防鹿柵を設置する作業に着手しました。柵の規模は総延長約350mで、2ヵ年での完成を予定しています。2014年度は、全体のおよそ6割に当たる200mの区間の設置を完了しました。その他、これまで育成していたカツラの苗木（177本）を岩尾別川沿いの防鹿柵の中に植え込みました。これらの作業は、ダイキン工業株式会社様の社員ボランティアの皆様を始め、たくさんの方々にお手伝いいただきました。

河川環境の改善に向けた取り組みでは、サケ科魚類の生息、産卵環境改善を目的に過去の河道整備で積み上げられていた土手を取り崩す作業を行いました。人為的な構造物を解消して川が自然に流れる範囲を作った結果、その後の増水などを経て、下流側に2股に分かれた流路が形成されるなどの変化が見られ始めています。

▲流路が変化する前の岩尾別川

▲流路が変化した後の岩尾別川

▲カツラの苗木の移植

しれとこ100平方メートル運動普及推進業務

知床財団は、斜里町主催「100平方メートル運動の森・トラスト」の安定的な継続と発展を図るため、運動地公開を含めた運動の普及と推進に取り組んでいます。

（1）普及推進業務

2014年7月末、知床自然センターのすぐ隣に「しれとこ森づくりの道」を開設しました。道のりは約1kmで、知床を訪れる皆さんに運動と森づくりを紹介する散策路として公開しています。

運動の趣旨に賛同する企業や団体、教育機関を対象に、運動地を歩きながら100平方メートル運動や開拓の歴史などを紹介し、実際の森づくりの作業も経験していただく運動地公開プログラムを行いました。地元の斜里高校をはじめ、東京都立南多摩中等教育学校の生徒など約309名が参加しました。

また、4泊5日の合宿イベント「知床森づくりの日」を3回開催し、計15名の参加がありました。

（2）岩尾別川河川調査及び生物相復元 DAIKIN

岩尾別川流域で行われる各種作業の成果を検証するため、河畔林と河川環境の調査を行っています。2014年度は過去3年間に引き続き、同河川の定点観測ポイントにて魚類の生息状況と河川構造の現状を把握する調査を行いました。このほか、岩尾別川沿いに設置している防鹿柵内外の植生調査も行っています。

生物相復元事業の一環として、カワウソが生息しているロシア・沿海州を訪れ、カワウソの生息環境を確認するなど海外事例の収集に努めたほか、国内外のカワウソ研究者を招聘し、岩尾別川を含む知床半島各地の現地視察を行いました。また、意見交換及び一般向けの講演会などを開催しました。なお、これらの取り組みは知床博物館や東京農業大学など外部研究者の協力を得ながら進められています。

▲岩尾別川沿いでの植生調査

収益事業

▲フェニックス様とのコラボレーションTシャツ
第3弾

▲オリジナル軍手

▲知床自然センター内のショップ

販売・有償貸出し業務

オリジナル商品の開発

知床財団の活動を広く知ってもらうことを目的に、オリジナル商品の開発を行いました。2014年度は「知床かばん」の新色と、「オリジナル軍手」の女性やキッズ用サイズを新たに製作しました。また株式会社フェニックス様のご厚意により、商品価格の10%が知床財団への寄附金になるオリジナルTシャツは、2013年度に作成したデザインを継続販売し、引き続き売れ行きは好調でした。

レンタルサービス

知床自然センターで長靴・双眼鏡の有料貸出しを実施し、のべ1,394人の方にご利用いただきました。冬季にはスノーシューの有料貸出しも実施し、778件の利用がありました。

羅臼ビジターセンターでは2014年度から長靴のレンタル業務を開始し、33件の利用がありました。

知床自然センター、羅臼ビジターセンター及びルサフィールドハウスで、ヒグマ撃退スプレーとフードコンテナの有料貸出しを行いました。2014年度は、ヒグマ撃退スプレー213件、フードコンテナ6件の利用がありました。貸出しの際には、契約内容や使用方法、ヒグマとの危険な遭遇を回避する方法についてスライド画像やフリップを用いて20分程度のレクチャーを行いました。

販売

知床自然センターでは、知床の自然に関する書籍、散策の際に役立つアウトドアグッズ、自然環境に配慮した知床ならではのお土産などを販売し、9,945,096円の売上がありました（前年度比108.47%）。羅臼ビジターセンターでも、書籍や地図、知床財団オリジナルグッズなどの販売を実施し、3,941,459円の売上がありました（前年度比92.5%）。また、電話やファックス、電子メール等で注文を受ける通信販売の売上は501,494円でした（前年度比145.7%）。

オンラインショップの運営

オンラインショップ「コムヌプリ」の運営・管理を行い、2014年度は167件、1,750,270円の売上がありました。このうち知床財団の個人賛助会員の入会は、134口（新規35口、更新90口、終身会員9口）ありました（前年登録数は合計113口）。

羅臼研究支援センター維持管理業務

羅臼研究支援センターの維持管理と利用受付、協力金徴収の業務を行いました。利用者数はのべ49人、612泊で、623,000円を施設管理協力金として徴収しました。野生鳥獣の専門家や大学院教授や大学院生、知床財団のインターン、ボランティアなどが施設を利用しました。

▲羅臼研究支援センター前での除雪作業

研修、講演、視察対応等

道内外の各種団体から依頼された研修、講演、講義、行政視察等に対応することにより、知床の価値を紹介、または、知床財団の持つ野生動物保護管理や調査研究、公園管理、環境教育のノウハウを広く提供・共有する活動を行っています。2014年度は、あわせて40件の対応を行いました。

▲北海道科学大学での環境特別講演会の様子

収益事業

2014年度研修・講演・視察対応等受け入れ対応実績

講　　演	平成26年度標津建設技術研究会（上田組）
	西武学園文理小学校4学年（近畿日本ツーリスト株式会社 埼玉教育旅行支店）
	アイヌ工芸品展「アイヌの工芸ー東北のコレクションを中心にー」（公益財団法人 アイヌ文化振興・研究推進機構）
	日本獣医学会学術集会
	エゾシカ広域捕獲技術研修会（北海道庁環境局エゾシカ対策課）
	電機連合（東芝ツーリスト株式会社）
	駒場東邦高等学校（株式会社 JTBコーポレートセールス教育第一事業部）
	北海道科学大学環境特別講演会（北海道科学大学環境マネジメント委員会）
	定例観察会「晩秋の自然を楽しむ音楽と語り」（野付半島ネイチャーセンター）
	ワイルドライフマネジメントフォーラム in 札幌
	別海町東公民館寿大学
	羅臼町高校生の水産教室
	羅臼漁業協同組合北方四島さけます資源の実態等の研修会
	根室町村議会議長会主体議員研修会
視 察 対 応	鹿児島県奄美市議会文教厚生委員会
	八王子市議会議員
	長野県大町市議会総務文教委員会
	大分県議会総務企画委員会
	埼玉県深谷市議会「深和会」
	青森県十和田市議会
	山梨県農政産業観光委員会委員
研 修 実 習	鳥獣保護管理の在り方検討のための現地調査（環境省）
	横浜国立大学理工学部
	北海道大学　獣医学部
	酪農学園大学　環境システム学部　生命環境学科
	北海道小清水高等学校
	北方四島交流受け入れプログラム（羅臼町）
	開成高校
	東京都立南多摩中等教育学校
	北海道斜里高等学校
	日本赤十字北海道看護大学
特別講義・検討会委員など	東京農業大学アクアバイオ学科講義
	北海道大学獣医学部獣医学概論講義
	知床学士認定制度運営委員会委員
	指定管理鳥獣捕獲等事業に関する検討会委員（環境省野生生物課）
	エゾシカ保護管理検討会委員（北海道庁環境局エゾシカ対策課）
	エゾシカ対策推進委員会委員（北海道庁環境局エゾシカ対策課）
	エゾシカ捕獲計画検討会委員（釧路振興局）
	釧路湖陵高等学校スーパーサイエンススクール
	農水省鳥獣害対策基盤支援事業（対策手法確立調査・実証事業）に係る検討委員会委員

財団管理運営事業

財団管理運営業務

理事会は、5月に第1回理事会、第2回理事会を開催し、2013年度事業・決算報告及び特定費用準備資金計画、代表理事の選出を行いました。第3回理事会（7月）、第4回理事会（10月）、第5回理事会（12月）は、賛助会員入会承認等について審議しました。第6回理事会（3月）は、2015年度事業計画・予算等について審議しました。

定時評議員会（5月）は、2013年度事業・決算報告及び理事・監事の選任について審議しました。臨時評議員会（7月、12月）では、定款の一部変更等について審議しました。

その他、年2回以上開催が義務づけられている代表理事と事務局の運営会議を9月と3月に開催しました。また、理事会・評議員会の開催時に事務局会議を行い、3月には今後5年間の中期的経営収支の試算を作成しました。

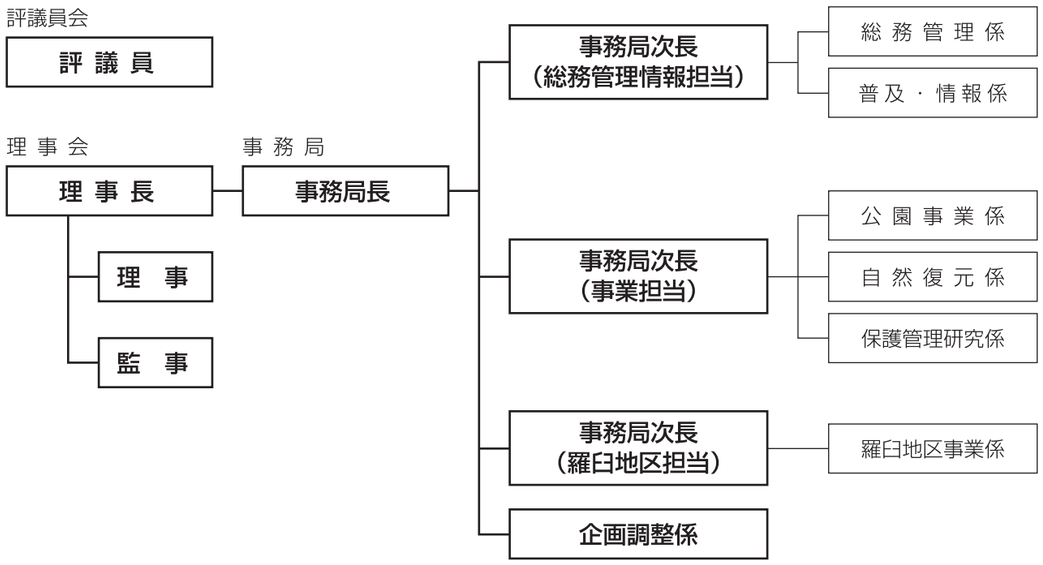
役　員

理 事 長	関 根 郁 雄
副理事長	辻 中 義 一
理　　事	大 瀬　　昇
〃	北　　雅 裕
〃	佐々木 泰 幹
〃	鈴 木 完 也
〃	田 澤 道 広
監　　事	中 川　　元
〃	宮 腰　　實
評議員長	高 橋 一 三
評 議 員	小 川 雅 勝
〃	金 澤 裕 司
〃	木野本 伸 之
〃	遠 山 和 雄
〃	吉 野 英 治
〃	吉 野 弘 志

組織概要

名　　称	公益財団法人　知床財団（2011年4月に名称変更　旧名称　財団法人　知床財団）
設　　立	昭和63年（1988年）9月23日
設 立 者	斜里町・羅臼町
基本財産	4,500万円
所 在 地	〒099-4356 北海道斜里郡斜里町字岩宇別531番地 知床自然センター
目　　的	この法人は、知床半島及びその周辺地域の自然環境に関する調査・研究、自然保護の普及啓発等の事業を行い、もって広く自然保護の保全と利用の適正化に寄与することを目的とする。
事　　業	(1)　野生動植物の調査・研究 (2)　自然保護の普及啓発 (3)　自然保護に関する諸団体との提携 (4)　自然環境の保全管理及び公園施設等の管理運営受託業務 (5)　その他この法人の目的を達成するために必要な事業
職　　員	35名

2015年3月末



知床の価値ある自然を私たちと一緒に守りませんか

http://www.shiretoko.or.jp/supporter/supporter.htm

「どなたでも知床の自然保護活動に貢献できます！」

知床の自然を未来へ遺していくためには、皆様の継続的な支援が不可欠です。
皆様が知床の自然を思う気持ちを私たちに託して下さい。

知床財団の賛助会員制度

会員になると、知床自然情報誌SEEDSや刊行物を定期的にお届けする他、知床自然センターの映像展示館の入館料免除など、各種特典があります。

個人年会員	5,000円/年	法人年会員	20,000円/年
個人終身会員	100,000円/終身	法人特別年会員	100,000円/年
寄付	おいくらからでも受け付けています。 (5千円以上のご寄附いただいた方に本誌を1部お送りします。)		

●振込先 郵便振替 02750-2-37694　●加入者名 公益財団法人 知床財団

知床自然センター
〒099-4356 北海道斜里郡斜里町字岩宇別531番地
TEL0152-24-2114 FAX0152-24-2115
E-mail info@shiretoko.or.jp
http://center.shiretoko.or.jp/

羅臼ビジターセンター
〒086-1822 北海道目梨郡羅臼町湯ノ沢町6-27
TEL0153-87-2828 FAX0153-87-2876
http://rausu-vc.jp/